様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

科学研究費助成事業　研究成果報告書

平成２６年６月２５日現在

機関番号：34310
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2011～2013
課題番号：23520444
研究課題名（和文）　当代散文の研究――記憶の中の中国革命史再構築の試み

研究課題名（英文）　A Study on the Contemporary Prose: An Attempt to Reconstruct the History of the Chinese Revolution in Recollections

研究代表者
楠原　俊代（KUSUHARA, Toshiyo）
同志社大学・グローバル地域文化学部・教授
研究者番号：30131288
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）3,000,000 円　、（間接経費）900,000 円

研究成果の概要（和文）：今の中国では、中国革命について「本当の話を語ること」がきわめて困難であるものの、それに抗して「当代人の責任」として、「多くの真実の資料」を残そうとする知識人がいる。そうした知識人らの回想録を含む当代散文を収集・読解・分析し、これまで語られることのなかった中国革命史の再構築を試みた。学会発表を２回行い、日本語論文を１編と中国語論文を２編発表したが、本研究は中国ではほとんど行われていないため、その空隙を埋めるものであるとの高い評価を得た。

研究成果の概要（英文）：It is extremely difficult to “tell the true stories” about the Chinese Revolution in present-day China.　However, there are some intellectuals who, despite the severe circumstances, have taken “responsibility for their contemporaries” and endeavored to preserve “the true records.”　I have made an attempt in this study to reconstruct the history of the Chinese Revolution which had never been told before, by analyzing my collection of contemporary prose which includes the memoirs of those members of the intelligentsia.　For this purpose, I gave two lectures in academic colloquia, and wrote one thesis in Japanese and two theses in Chinese.　My works have been highly evaluated on the ground that this kind of academic tasks have scarcely been carried out in China and my study contributes to fill the gap.

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論
キーワード：中国文学・中国革命史・文化大革命・中共党史・韋君宜・『思痛録』・国際情報交換・中国

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、平成 19～21 年度に「韋君宜から見た中国革命史再構築の試み――作家、編集者、革命家の視点から」の研究を遂行し、韋君宜（1917－2002）の全著作と関係資料を収集し、読解・分析することによって、作家、編集者、革命家であった韋君宜の視点から、中国革命史の再構築を試みた。本研究によって、中国においては現在も歴史の改竄・削除が行われ、「真話（本当の話）を語ること」がきわめて困難であることと、それに抗して「当代人の責任」として、「多くの真実の資料」を残そうとしている知識人がいることが明らかになった。この 30 余年来、文革は議論することも回想することも許されない歴史の禁忌となったといわれ、しかもこの禁忌は、中国革命史全体にまで及んでいる。しかし、禁忌があるとはいえ、これまで語られることのなかった中国革命の「真実」が、目立たないかたちで様々な所で述べられていることが分かってきた。そこで、本研究「当代散文の研究――記憶の中の中国革命史再構築の試み」への着想を得た。

２．研究の目的

1998 年には、新中国の半世紀の歴史を「反思（反省・振り返って考えなおす）」する書籍が数多く出版された。韋君宜の『思痛録』もその１冊であるが、本書は出版後、極めて大きな反響を引き起こし、多くの知識分子を啓発して、歴史を「反思」する責任感と使命感を呼び覚ましたため、文化界から「韋君宜

現象」と称されたという。それでは、『思痛録』に啓発された多くの知識人は、歴史といかに向き合い、「反思」したのか。

本研究は、新中国成立以後、半世紀余の歴史を「反思」する、回想録を含む当代散文を収集し、個人が歴史にいかに関与しうるのか、個人の証言（記憶）は歴史の中でいかなる意味を持ちうるのか、また文学（散文）作品が歴史に対していかなる役割を果たしうるのかについて考察しながら、文献の読解を進めるとともに、平成 19～21 年度に遂行した研究「韋君宜から見た中国革命史再構築の試み――作家、編集者、革命家の視点から」で得られた「中国革命史」と丹念につきあわせて分析することによって、さらに精度の高い「中国革命史」の再構築を試みようとするものである。

３．研究の方法

研究の方法は、資料収集と文献の読解・分析に大別される。

(1) 資料収集

①新中国成立以後、半世紀余の中国革命の歴史を「反思」する、回想録を含む当代散文と、国内外の中国革命史関係図書を収集する。

②申請時には、毎年１回、中国に出張し、資料収集と関係者へのインタビューを行うとともに、研究者と会い、意見交換を行う予定であったが、平成 23 年度は台風 12 号による飛行機の欠航のため、また平成 24 年度は北京における反日活動の激化のため、平成 25 年度は研究代表者の全治３カ月の重傷（腓骨遠位端骨折、7 月 20 日、京都大学第 28 回中国文学会出席時、京都大学本部構内で）のため、1 度も北京に行くことができなかった。その代替措置として、平成 26 年 1 月 22 日、南開大学外国語学院専任講師の出和暁子氏に、本研究の研究協力者として、研究代表者の作成した原稿に基づき、韋君宜の次女の楊団氏へのインタビューを実施していただいた。また、研究成果の拙論 3 編を中国の研究者に配布し、メール・手紙などで意見交換を行なった。

(2) 文献の読解・分析

文献資料の読解を進めるとともに、平成 19～21 年度の研究「韋君宜から見た中国革命史再構築の試み――作家、編集者、革命家の視点から」で得られた「中国革命史」と丹念につきあわせて分析することによって、さらに精度の高い「中国革命史」の再構築を試みる。本研究の成果は、京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センターの共同研究班「長江流域社会の歴史景観」（森時彦班長）と「現代中国文化の深層構造」（石川禎浩班長）に参加して報告を行うとともに、論文を執筆する。また、これまでの研究成果をまとめて、学術図書『韋君宜研究――記憶のなかの中国革命』として刊行するための準備を行う。

４．研究成果

(1) 京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター「長江流域社会の歴史景観」共同研究班において、2011 年 12 月 9 日「韋君宜と中共湖北省委員会」の報告を行い、それに基づき論文「武漢時期の韋君宜」を発表し（森時彦編『長江流域社会の歴史景観』、京都大学人文科学研究所、2013、383-419 頁）、以下の諸点を明らかにした。

①韋君宜は 1938 年 10 月に恋人の孫世実を日本軍の爆撃で亡くし「気も狂わんばかりの悲しみの中で」、文章（「犠牲者的自白」）を書き、1939 年 1 月に発表している。この文章について韋君宜は 1980 年に補足説明をしたうえで、あわせて『似水流年』（湖南人民出版社、1981 年）に収録している。この補足説明の中で、韋君宜は孫世実の死について、人生最大の不幸ではない、むしろ幸福でさえあり、彼を悼む必要はまったくない、と考えるようになった、その原因は、1938 年当時思い描いていた「将来」、孫世実がそのために命を捧げた「将来」を、中華人民共和国成立以後 30 余年も生きてしまい、その間、光明、理想、愛情、犠牲、残酷、愚昧、民族、国家、運命……それらが複雑に交錯している全てを見たからであると言う。それでは、その全てとは何であったのか、中共入党から武漢時期の韋君宜に焦点を当て、一二九運動の闘士たちのその後の生涯の軌跡をたどることによって、中国革命の実像の一端を明らかにした。

②中共中央党校党史研究班編『一二九運動史要』（中共中央党校出版社、1986 年）の編集の際、1937 年に学生は北平からどこに行くのかについて、当時において意見の対立があったばかりでなく、それをどう記述するかについても、激しい意見の対立があり、革命の歴史を記述する際には、事実にしたがって叙述することにも困難がともなうこと。

③『一二九運動史要』の最終章には、抗日戦争中、犠牲になった一二九戦士 58 人の名簿と、そのうちの 20 人の略歴が収録されている。抗戦勝利後、40 年以上も経っているのに、20 人しか紹介できなかったのは資料不足のためであり、名簿もごく一部にすぎないと言うが、名簿にのみ収録され、略歴の記されなかった 38 人は、紹介できないような死に方をしたのではないか。例えば、略歴の記されなかった王文彬は、抗戦ではなく、「反革命」として 1939 年銃殺に処せられている。黄秋耘も回想録で、同時代の戦友たちのうち、抗日戦争や解放戦争で犠牲になった烈士は死

に場所を得たといえるが、「自己人（身内）」の監獄や労働改造所の中で亡くなった者もおり、「われわれの頭上に落ちてくる、「自己人」の各種有形無形の銃弾と砲弾は敵側から飛んでくるものよりも少なかったとは思えない」と述べている 。

④韋君宜の『思痛録』北京版と香港版の異同の特にはなはだしい、前言と第1･2章については、研究代表者の先行論文「中国共産党の文芸政策に関する一考察――『思痛録』をてがかりに」（森時彦編『中国近代化の動態構造』、京都大学人文科学研究所、2004 年）があるにもかかわらず、福岡愛子『文化大革命の記憶と忘却』（新曜社、2008 年）270 頁では、北京版における「削除が顕著になるのは胡風批判運動に関する第3章からである」と記しているのは間違いである。また同書 275 頁には、『思痛録』初版が 1998 年 5 月に出版された際、「責任編集者」であった丁寧の名前で、巻末に説明文が付されていた、と記すが、同書の巻末に付された「必要な説明」の作者は、『思痛録』の出版元を探すよう依頼されていた牧恵であり、丁寧の文章は収録されていない。『思痛録』の原文にさえあたれば犯すはずのない間違いであるが、本稿において同書の誤りを指摘することができた。

(2) 京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター「現代中国文化の深層構造」共同研究班において、2012 年 11 月 30 日「当代散文の研究――記憶の中の中国革命史再構築の試み」の報告を行なった。

前世紀末は、中華人民共和国成立五十周年、抗戦勝利五十周年、北京大学創立百周年などの節目の年を迎えたため、数々の書籍・叢書が出版された。それまでの百年を 1 つの時期として、この間の優れた文学作品・「経典」の叢書や学術書のシリーズも数多く刊行された 。これらの書籍の出版は、この 1 世紀、あるいは新中国成立後の 50 年の歴史を振り返り、見直す契機ともなった。1990 年代後期には、1950～70 年代の歴史に関する書籍も、回想録を含めて次々に出版された。節目の年を迎え、多くの人がこの 100 年の、あるいは 50 年の歴史を振り返り、その「歴史」について語ったが、この時、これまで語られることのなかった「歴史」について述べる者も数多くいた。本報告では、回想録を含む当代散文の研究を通して、中国革命の「歴史」が、いかに語られてきたか、いかに語られようとしているかについての考察を試みた。

まず、これまで語られなかった歴史、「文革」の場合について、季羨林の『牛棚雑憶』と馬識途の『滄桑十年　共和国内乱的年代 1966-1976』によって論じた。

次に、これまで語られなかった歴史、「北京大学」の場合について、銭理群『拒絶遺忘』、洪子誠「北大記憶・批判者和被批判者――北大往時之一」と謝冕、胡的清主編『北大遺事』によって論じた。

さらに、1950 年代には王瑶の『中国新文学史稿』が出版されたが、王瑶批判の一環として『新詩発展概況』が執筆された。その間の経緯を「現在」の時点で振り返り、歴史的意義を検討するとともに、一部分しか発表されなかった『新詩発展概況』の全文を収録した謝冕・孫紹振・劉登翰・孫玉石・殷晋培・洪子誠の共著『回顧一次写作――〈新詩発展概況〉的前前後後』が、2007 年北京大学出版社から出版されている。主として本書に基づき、これまで語られることのなかった、1950 年代の 2 つの文学史の「歴史」について論じた。

最後に、その他の「反思」の書として、何方の『党史筆記――従遵義会議到延安整風』・『従延安一路走来的反思：何方自述』、李新著・陳鉄健整理『流逝的歳月――李新回憶録』などについても言及した。

本報告に基づき現在論文を執筆中であり、平成 26 年 9 月末日締め切りの研究班報告論文集に応募する予定である。

(3) 平成 26 年 1 月 22 日、研究代表者の作成した原稿に基づき、韋君宜の次女の楊団氏へのインタビューを、本研究の研究協力者として、南開大学外国語学院専任講師の出和暁子氏に実施していただいた。本インタビューによって、これまでわからなかった、以下の諸点について明らかになった。

①1937 年末、本名の魏蓁一から韋君宜への改名の理由。

本名の魏と韋が同音 wei ということもあるかもしれないが、韋君宜は、清華大学での革命運動のリーダーの一人であった韋毓梅について 2 編の追悼文を書き、韋毓梅のことを、「我的引路人（私を導いてくれた人）」と記していることから、韋毓梅の影響もあったのではないか、と考えていた。しかし、韋毓梅の影響はないはず、魏蓁一と韋君宜は、魏・韋だけでなく、一・宜も同音 i で、発音が近いということと、両親がつけてくれた魏蓁一という名前を変えることは、封建的な、あるいはその色彩のある家庭および旧世界との決別と、革命への意志の表明であるとのことだった。

②楊団氏管理のインターネット上の韋君宜紀念館「年譜」（2005 年 9 月 18 日閲覧）の、1957 年部分の誤りについて。

1957 年は反右运动が始まり、韋君宜も一方で批判されながら、もう一方では右派を批判する会議を主催し、『文芸学習』などに多くの文章も発表して、大変な激務であったと思

われる。「年譜」には、1957 年次男の楊飛出産とあり、どれくらい仕事を休まれたのか疑問であったが、1955 年 12 月出産の間違いであった。

③香港版『思痛録』に収録された「結語」に、「日本には田中角栄、竹下登がいる。アメリカにはカーターがいる」とあり、いきなり、1977-81 年第 39 代アメリカ大統領のカーターと、1972-74 年第 64・65 代内閣総理大臣の田中角栄、1987-88 年第 74 代内閣総理大臣の竹下登が出てきて、唐突な感を抱いた。そこに、どのような意味があるのか？韋君宜は、田中角荣・竹下登・カーターを、どのように評価していたのか？ 疑問であったが、この点についても楊団氏のご意見を伺った。

(4) 韋君宜の『思痛録』香港版と北京版の異同の詳細な注釈を付した日本語訳と、1930 年代後半の武漢時期から 40 年代の延安・1950 年代・文革期の各時期における韋君宜について論考を加え、最後に、韋君宜の著作における「歴史」の意味について明らかにしようとした拙論と韋君宜年譜を収録した拙著『韋君宜研究』の原稿を執筆、整理し、平成 26 年度科研費（研究成果公開促進費）学術図書に応募した。審査の際の所見は、「学術研究の成果を公開するものであるか疑問がある」とのことで、採択されなかったが、本書は、韋君宜の全著作の分析を通して、中国革命の「真実」を再構築しようとするものである。全訳『思痛録』も、香港版と削除部分の多い北京版の異同を逐一明記することによって、中国大陸では中国革命がどのように記述されなければならないか、その歴史認識のありようを明らかにするもので、韋君宜に関するこのような研究はこれまでなかったものであり、中国（香港を除く）では、韋君宜の『思痛録』原作がいまだに出版されず、書物として文化大革命を論じることさえ禁止されている現在、本書の刊行には大きな意義と学術的価値があるといえる。

(5) その他に、以下の 2 編の中国語論文を発表した。

①「韋君宜与『文芸学習』雑誌」、石川禎浩主編『二十世紀中国的社会与文化』所収、北京：社会科学文献出版社、125-167 頁、2013 年。

②「韋君宜筆下“歴史”的含義」、森時彦主編『二十世紀的中国社会』所収、北京:社会科学文献出版社、506-544 頁、2011 年。

上記の 2 編を含む拙論を洪子誠北京大学中文系元教授や韋君宜研究者の宋彬玉中央人民大学中文系元教授らに送付し、情報交換を行うとともに、ご教示をいただいた。特に「韋君宜与『文芸学習』雑誌」については、1950 年代の最も優れた文学雑誌の 1 つであった『文芸学習』における韋君宜の工作は注目するに値するにもかかわらず、中国ではほとんど研究がなされていないため、その空隙を埋めるものであるとの高い評価を洪子誠教授からいただいた。

韋君宜『思痛録』の削除部分が、いまだ中国大陸で刊行を許されないことからも知られるように、本研究テーマ自体が、中国大陸ではあからさまに論じられないものである。かねてより研究上の意見交換をおこなってきた中国社会科学院近代史研究所の聞黎明氏からも、申請者の研究テーマは、「扱った人はほとんど無いようだ、少なくとも自分は見たことがない」と言われており、これまで国内外の関連研究のなかで、一貫してこのように位置づけられるもので、ここに本研究のインパクトがある。中共現政権にとって「敏感」な問題である歴史認識と中国革命史再構築については、日本でこそ中共の文芸政策・宣伝工作に影響されることなく、大量の文献資料に依拠して実証的な研究を推進できるものなのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計２件）

① 楠原俊代、当代散文の研究――記憶の中の中国革命史再構築の試み、京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター「現代中国文化の深層構造」共同研究班、2012 年 11 月 30 日、京都大学人文科学研究所本館

② 楠原俊代、韋君宜と中共湖北省委員会、京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター「長江流域社会の歴史景観」共同研究班、2011 年 12 月 9 日、京都大学人文科学研究所北白川分館

〔図書〕（計３件）

① 森時彦、他、京都大学人文科学研究所、長江流域社会の歴史景観、2013、383-419

② 石川禎浩、他、北京：社会科学文献出版社、二十世紀中国的社会与文化、2013、125-167

③ 森時彦、他、北京：社会科学文献出版社、二十世紀的中国社会、2011、506-544

〔その他〕

ホームページ等
http://www.geocities.jp/nanyanjd/newpage1.html
http://www.geocities.jp/nanyanjd/prof

６．研究組織
(1)研究代表者
楠原　俊代（KUSUHARA, Toshiyo）
同志社大学・グローバル地域文化学部・教授
研究者番号：30131288

(2)研究協力者
出和　暁子（DEWA, Akiko）
南開大学（中国）・外国語学院・専任講師